



翌朝、朝飯を食った頃に、先生から連絡があった。アカデミーの小型機をスペースポートに回すので、それで帰ってこいと言う話である。女子たちとは、スペースポートで合流することにして、俺とジョージもそちらに向かうことにする。

「お兄ちゃん、気をつけてね」

「ああ、心配するな。大丈夫だ」

「ケンジ、しっかりやってこい」

「無理はしないでね」

そんな家族の見送りを受けて、俺とジョージは車に乗り込んだ。スペースポートまでは、小一時間。アカデミーに戻ってからのことをあれこれと考えている間に、車はもう富士山の麓を走っていた。一般の旅客用ターミナルの脇にある小さなプライベート機用ターミナルに車を着けて、荷物を下ろし、こじんまりとしたロビーでしばらく待っていると、女子たちも到着。カウンターで手続きを済ませ、ゲートに向かう。

「おお、カシオペアだ。これ一度乗ってみたかったんだよね」

そう言うジョージの先、強化ガラスの向こう側に見えるのは、銀色の翼を持った小型の宇宙機、VS120A型の汎用シャトル、通称カシオペアだ。アカデミーの専用機である。小型だが、大気圏内飛行が可能な翼と高密度プラズマエンジンを備え、地球と周辺の宇宙都市の間ならば、余裕で飛ぶことができる。それ自体の推進力は大きくないが、地球周辺宙域の加速ステーションネットワークを利用して、L2までなら3時間ほどで飛ぶことが可能だ。

「これって、VIP専用機でしょ。学生が乗るなんて、私たちが初めてじゃない？」

「そうですよね。先生たちだって、なかなか乗れないはずだし」

「それだけアカデミーも、切羽詰まってるってことよ」

「同意」

そのとおりだ。VIP専用機を送ってでも、俺たちを早く連れ戻して出発したい、ということなのだろう。ゲートでは、アカデミーの職員が待ち構えていて、俺たちはそのまま搭乗。すぐに出発となった。

「うわー豪華。ほんとに、こんなのに乗っていいのかな」

「あんたねえ、貧乏人丸出しじゃない。恥ずかしいから騒がないでよね」

「でも、確かにすごいですね。ちよつと緊張します」

落ち着いた内装のキャビンに革張りのシート。たしかに俺たちには場違いだ。実際、これで移動するのはアカデミーの理事長や役員と賓客ぐらいである。乗れる人数はせいぜい10人から15人。今回は、俺たちの貸し切りだ。俺たちが着席するやいなや、シャトルはゲートを離れ、順番待ちもなく空に打ち出された。地球からの出発は、磁気浮上式のマスドライバーと指向性磁場による加速がほとんどだ。マスドライバーのトンネルで音速の5倍程度まで加速されたあと、指向性磁場に乗って、さらに軌道速度近くまで加速されるから、シャトルのエンジンの出番は、軌道投入の直前までない。もちろん、慣性制御によって体感する加速度はごく僅かだ。地球低軌道に乗ったシャトルは、通常ならば一旦、静止軌道ステーションを経由する。しかし、今回は、低軌道から一気に地球軌道の離脱速度まで加速され、月軌道上のルナ・ステーションのひとつによって軌道修正・再加速されて、そのままL2まで直行する。静止軌道の内側で、この速度はスピード違反である。おそらくは特別な許可で航路の優先使用を認められているのだろう。

「地球がどんどん遠くなるねえ。もう少し、ゆっくりしたかったなあ。実家にも帰れなかったし」

ケイがつぶやく。俺たちのシャトルはどんどん地球から離れながら、地球の裏側に回り込みつつある。青い地球が、遠ざかりつつ、徐々に欠けていくのがわかる。地球基準の速度は、既に秒速1000Kmを軽く越えている。この速度なら、地球を回り込みつつ月軌道まで2時間弱だ。そこで、ルナ・ステーションの指向性磁場で惑星間航行速度まで加速され、さらに1時間ほどで、地球から150万KmのL2まで飛んでしまうのである。

「やっぱり宇宙に出ると、星がすごいな。しばらく地球の空を見ていたから新鮮だよ」

「正面の天の川のあたりがこと座ね。星が多すぎて星座がわからないけれど、ベガの明るさはわかるわ」

「だとすると、こっちがアルタイルだな。確か、問題の星は、はくちよう座のデネブとベガの間あたりだったか」

「そうね。夏の大三角の一边の少し内側だったわ。ここからじゃ見えるはずもないけど」

「褐色矮星だからな。相当近くまで行かないと肉眼じゃ見えないだろう」

「でも、コンピュータは。そんな星をどうやって見つけたんでしょうね」

「もしかして、あれじゃないかな。科学局の深宇宙探査衛星ネットワーク。前に、訓練中のレスキューで使ったやつ。たしか、あの時、デイブさんはコンピュータが正式にアクセス出来るようにしてもらって言ってたよね」

「でも、それなら、コンピュータ以前に科学局が気づくんじゃない？そのために作った衛星なんでしょ」

「それもそうだな。どうして科学局は気がつかなかったんだろ」

「必ずしも不思議ではない。深宇宙探査ネットワークは通常、オールドの雲より内側を探索範囲にしている。自動探索のプログラムに引っかけるとしたら、褐色矮星がオールドの雲に入ってからになる。それではもう遅い」

「オールドの雲って、どのへんなんだっけ？」

「あんたね。講義で何聴いてたのよ。だいたい、ナビがそんなことでどうするの。雲の一番密度が高い部分は太陽から0.1光年から0.3光年の間よ。でも、はっきりした境界はなく、一説には、密度は低ければ1光年くらいまで広がっているとも言われているわ。太陽の重力が他の恒星の重力より勝るぎりぎりのところまでね」

「褐色矮星はどのへんにいるの？」

「そう言えば、あと10年で、って先生は言ってたな。オールドの雲まで到達していないとすれば、1光年以上離れていることになるが、でもその距離を10年でというのは信じられない速度だ」

「ポイント1cってことよね。どうやったら、木星の3倍の大きさの星がそんな速度になるわけ？」

「考えられる原因は、銀河中心の巨大ブラックホール。ブラックホールの回転によって生じたエルゴ領域に飛び込んだために、多くの質量をブラックホールに吸い取られた結果、その質量の分加速されたという仮説が最も可能性が高い」

「いわゆるペンローズ過程だね。古典物理の授業で習ったことがあるよ。ブラックホールの回転で引きずられた時空からエネルギーをもらうんだよね」

「銀河中心からだ、その速度でも25万年はかかる計算よね。よりによって、それが太陽系に飛び込むなんて、運が悪いとしか言いようがないわね」

「まだ、銀河中心部は人類未到の場所。これはあくまで仮説に過ぎないのだけれど確率から言えば、運が悪いと言う言い方は間違いいではない。敢えて言うならば、相当に・・・」

「たしかに・・・」

そう、これは相当に運が悪い話だろう。6500万年あまり前、地球に落ちてきた直径10Kmほどの隕石がきっかけで、今の人類よりもはるかに長い期間栄えた恐竜が絶滅した。かつ

て人類は、同じような災厄の可能性について議論し、様々な対策を考えた。今では、そのクラス隕石や小惑星ならば、造作も無く軌道変更が可能だ。しかし、それが惑星サイズとなると、現在の技術をもってしても、かなり難しい。まして、恒星のなりそこねである褐色矮星は、太陽系最大の木星よりはるかに大きな天体である。直接衝突しなくても、その重力だけで、太陽系を大混乱に陥れるだろう。地球だけなら、頑張れば元の軌道に戻せるかもしれないが、太陽系全体の重力バランスが狂ってしまえば、もはや、どの惑星も軌道の安定は難しい。太陽系は誕生直後の混沌とした状態に戻ってしまう可能性が高いのである。

そんな話をしている間に、シャトルは月軌道上にあるルナ・ステーションによって加速され、一気に速度を上げてL2へと向かう。距離はここまでの4倍あるが、時間は半分の1時間しかかからない。

「おや、先生からだ。共有するよ」

ジョージがそう言うと、目の前にコミュニケーションパネルが開く。もちろん、これはインターフェイス経由の仮想パネルなのだが、共有されているから全員が同じ画像と音声を確認できる。

「諸君、無理を言ってすまないな。せつかくの休みだったのに」

フランクは本当にすまなさそうな顔をしている。まあ、それだけ自体は深刻だということなのだろう。

「いえ、問題ありません。事態が事態ですから」

「そう言ってもらえると助かる。早速で申し訳ないが、これからの話だ。現在、ST2Aをスペースガード基地の格納庫に待機させている。君たちには、到着後、支度を調べたらすぐに基地のB53格納庫に向かってほしい。私は先に行って準備しておく。何か質問はあるか？」

「支度、と言っても、今回、どれくらいの期間のミッションになるんですか？ 俺やジョージはともかく、女子はそれなりに準備が必要だと思うので」

「それなり・・・ってどういう意味よ。失礼ね。でもまあ、気を遣ってくれたことは褒めてあげるわ」

「ケンジ君、ありがとうございます。でも、訓練艇の中だと着替えもままなりませんよね。準備と言ってもたいしたことではなさそうですけど」

マリナの言うことは確かに正しい。訓練艇のスペースでは、着替えや食事も厳しい。仮眠用のスペースはあるが、全員分はもちろんない。どう考えても長期間のミッションには不向きだ。

「その点だが、一週間は我慢してくれ。今、支援船が出航準備をしている。ちよつと足が遅い船だが、できるだけ早く追いつくようにするつもりだ」

「それなら、このまま行っても良くない？ ちよつと旅支度だし」

「そうね。もともと、あと一週間くらいは地球にいる予定だったし、問題ないわ」

「そうですね。私もそれがいいと思います」

「同意」

「僕も問題ないよ」

「それじゃ、そうしよう。先生、このシャトルをそのまま基地に降ろせますか？ そうすれば時間の節約になると思いますが」

「そう言ってくれると助かる。早速手配しよう」

「ところで、一つ気になることがあるんですが」

「なんだ、何でも言ってみろ」

「今回、オールトの雲の先まで行くんですね。そのミッションにST2Aでいいんですか？」

「そうか、君たちにはまだ言ってなかったな。抜かりはないよ。まあ、見てのお楽しみということにおこうか」

「まさか、浦島太郎オチじゃないですよ。帰ってきたら何十年かたってました・・・なんて嫌ですよ」

ケイが言う。まあ、1光年やそこいらだから、通常航行でも往復3、4年というところだろうが、そもそもそれでは、このミッション自体が間に合わない。おそらく、ワープが可能な船を使って運んでもらうといったところだろう。

「あはは、さすがにそれはないから心配するな。ただ、ちよつとリスクがあるのは確かだが、それは着いてからのブリーフィングで話をしよう」

「えー、もったいぶらないで教えてくださいよ」

「あんたねえ、しつこいわよ。どのみち、もうすぐ到着なんだから、それからでもいいじゃない」

「まあ、楽しみにしていたまえ。それじゃ、こっちは用意があるから、また後で会おう」

フランクがそう言うのと通信が切れた。リスクつてのがちよつと気になるが、そもそもこのミッション自体がリスクだらけだし、いまさら少しくらいリスクが増えても問題はないだろう。

「まもなく最終アプローチに入ります。着席して到着に備えてください」

アナウンスが入り、それに続いて軽いサイン音が鳴ってベルトサインが点灯する。シートベルトはないが、座ってしばらくすると、体はやんわりとシートに固定される。サラウンドに切り替えると、前方には明るく輝くL2ステーションがあった。まだ米粒のようにしか見えないが、この速度なら、すぐに着陸だ。それから、太陽系の果てまで飛ぶことになる。不安がないと言えは嘘になるが、エキサイティングな話であることは間違いない。俺は、どんどん大きくなるL2ステーションを見ながら深呼吸した。